

グラントワ応援団通信

第30号

平成23年8月22日

映画で豊かな人生を

文化事業課 野村 晶美

「映画を一本観ることは、一つの人生を味わったことになる」

学生時代何かの本に書いてあった言葉です。その頃の私には映画館で映画を観る環境が身近にあり、気になる映画はできる限り映画館で観ていましたし、何かの機会で自分にご褒美を与えたい時は「今日は一日三本映画を観てよし!!」といった感じで、映画を観ることをとても楽しみにそして贅沢に感じていました。

映画館で映画を観ると私は完全にキヤストと化し、どっぷり入り込んでしまいます。そのため、映画館を出て家路に着く際、楽しい映画の場合はルンルンで帰り、悲しい映画の場合は、帰路はもちらん家に帰ってから涙がとまらなかつたり、その状態を2〜3日引きずってしまったりもします。それくらい入り込みます。そのため冒頭の言葉を初めて目にした時は、「その通りだ!!」と思いましたが。その映画の中で生きた気になり、その人の人生を少しだけではあります。映画が味わった気になってしまいます。映

画を観ることはいろんな気持ちを感じることででき、視野を広げてくれ、心を豊かにしてくれます。そしてどんな映画でも見終わった後に「今の自分の人生を大切に生きよう」と思うのです。

今は映画を観たくても、車で片道2〜3時間かけないと観ることができません。グラントワでは月に一回の上映しかなく、その月一回の映画でできるだけ幅広く多くのみなさんに映画を楽しんでいただきたいと思っております。

毎月二回映画ボランティアさんによる会議が行われ、グラントワシアター作品選定をしています。映画ボランティアさんの映画への愛、そしてそれを皆さんに届けたいという強い思いがグラントワシアター上映に繋がっています。全ての方のリクエストにお応えすることはできませんが、私達が皆さんに観ていただきたいと思つて上映した作品を実際皆さま

んに喜んで観ていただけた時は本当に嬉しく思います。

皆さんも映画を観ることで少しだけ現実から離れ、大きなスクリーンで観ることで味わえる感動をぜひグラントワシアターも活用していただき、いろんな人生を味わっていただけたらと思います。

石見神楽と

コーデイネーター

神楽衣装グループ 原田フジエ

幼き頃、年に一度の秋祭りは大人も子供も、一大イベントであった。

どこの家でも沢山の祭りがあり、夕方、鎮守の森の八幡宮から聞こえて来る笛や太鼓が気になって仕方がない。そのうち皆が提灯の明かりで勇み足に到着、今年こそ朝まで寝ま

いと誓つても、夜中二時頃になるとあの太鼓の側ですら寝入ってしまう。石見人であれば胎教から聞いているので心地良い音なのだろう。朝日を眩しく感じ乍ら家路を急いだあの頃が懐かしい。

「千早振る 玉の御すだれ 巻き上げて 神楽の声を きくぞうれしき」 農耕民族の我国は神様に五穀豊穰をお願いし、お札に出来た作物を直会（なおりい）として神と分け

合い食し神楽を奉納する関係を現在まで恭しく伝承して来た。石見神楽は石見独特の性質を持っており、世界各国から招待される。誇り高い伝統文化を後世に伝承して行く為の何かお手伝いが出来ない物かと、神楽好きな者が集まり、少子化が進む中で幼い時から衣装を着せて練習させてあげたら、多くの子供達が興味を持ち、受け継いでもらえるのでは無かるうかとボランティア室で月一度、七・八人が集まり戴き物の帯地を、コーデイネーターをし合い乍ら、笑い声の絶えない楽しい二時間を過ごしている。職員の方々の会話も弾み、宿題の作品を褒め合ったり、夜神楽最後の週のプレゼント・グッズの烏帽子、陣羽織二着分を提供している。神楽の好きな、首を振り振り練習している子供に当ります様にと祈り乍ら、堅い帯を縫う一針一針は、指を刺す事もしばしばである。

ボランティアとは「奉仕する」と言う意味だそう。誰かに必要とされているのだと思う信念で喜びを感じている。最近では幼稚園・保育園からの依頼も有り、極力希望に応じ、貸し出しにも役立ちたいと思う。家に眠っている帯が、変身して第二の役目があれば、帯にも喜んで貰えると思う。出番を待っているタンスの中の帯を、今一度提供して下さる事を願って、伝承保存に御協力をお願いします。

世界へ発信「石見神楽」

「サウジアラビア編 その②」

企画広報課 木原義博

グラントワ応援団通信第29号に引き続き、今回も「石見神楽」サウジアラビア公演について記させていただきます。

娯楽のないサウジアラビア国民にとって年に一度開催される「ジャナドリア祭」は本当に貴重なイベントなのでしょう！期間中に100万人もの来場者があるとのこと。日によってシングルデーとファミリーデーがあり、シングルデーの時には白いトープという民族衣装を身につけた男性のみが会場に入ることが許されます。（これは差別ではなく、区別だということですのであしからず）

日本から約7500キロ離れたサウジアラビアの国民にとって日本の伝統芸能は余程珍しいのでしょうか！何とか見ようとして観客同士が喧嘩を始め、国家警備隊が出勤する始末です。また、派手な衣装にも興味津々で、かつ、触って確かめる風習があるらしく、やたらと触りに来ます。シングルデーはちよつと異様な雰囲気でした。

一方、ファミリーデーの時には会場内に女性も入れますので、アバーヤと

いう黒い民族衣装で全身を覆い、頭もスカーフで隠した女性が楽屋から舞台に向かう神楽の団員を待ち伏せし、次から次へと写真撮影を行うので、団員が舞台に向けて進めません。最後には国家警備隊数名が団員一人ずつを警護して舞台まで誘導する始末です。

また、本番が始まるとまるで日本のロックコンサートのような雰囲気になります。女性の黄色い声が飛び交い、興奮した男性が舞台上がり警備隊に取り押さえられたりと、日本館の野外ステージの盛り上がりは最高潮に達します。

日本各地で神楽を演じている団員の皆さんもこのような経験は初めてで、「自分達は一体何者？」と錯覚するような光景が次から次へと起こります。結果的に日本館は入場制限を行わなければ危険な状況となり、それでも開催期間中の日本館の入場者数は30万人を超え、大盛況となりました。

ジャナドリア祭終了後には、在サウジアラビア日本国大使館より遠藤茂特命全権大使が今回の成功のお礼に、わざわざ益田市に來られました。

古事記編纂1300年を平成24年に控え、島根県は今、「神々の国しまね」プロジェクトを全県あげて推進しています。石見神楽は当プロジェクトには欠かせない伝統芸能であり、今後益々露出度が高まります。国内外に島根県を代表する伝統芸能「石見神楽」が認知され、結果として益々隆盛を極めることになれば、石見圏域としても喜ばしいことではないでしょうか。（完）



*上記五枚の写真「サウジアラビア公演風景」

あ と が き

今、美術館では「ロンドン展」を御覧いただけます。五〇〜六〇年代ヨーロッパの若者文化、当時のライフスタイルがテレビやスクリーンなどの生活用品やファッションを振り返ることで蘇えます。モデルのツイッギーを知る世代とも重なるのでしょうか、館内にはポピュラー音楽界最高・不世出のアーティスト「ビートルズ」のLPレコードが多々展示されていて、懐かしさでいっぱいの人も多いことでしょう。暮らしの中で、あまりレコードを聴くことのなくなったこの頃。そのジャケットは醸し出す興味・愉しみ感や風格がコンパクト・ディスク（CD）を凌駕しているとあらためて思いました。そして今、音楽は配信の時代へと移り変わりつつあるようです。ちよつと立ち止まり、古き良き時代を味わえるラジオやレコードプレーヤーなどをたくさん楽しめる展覧会です。

（陽竈）